三重県埋蔵文化財調査報告152

天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告（II）

～一志郡嬉野町天花寺所在、天花寺城跡・小谷赤坂遺跡（第３次）の調査～

1997・3

三重県埋蔵文化財センター

序

天花寺城跡・小谷赤坂遺跡は、地理的に三重県のほぼ中央に位置する一志郡嬉野町に所在します。嬉野町には雲出川の支流である中村川が貫流しており、その流域には旧来より数多くの重要な遺跡が見つかっています。

今回の調査は、主要地方道松阪一志線緊急地方道路整備工事に伴う緊急発掘調査であります。天花寺城跡・小谷赤坂遺跡におきましては、平成７年度の当埋蔵文化財センターによる調査、平成８年度の嬉野町教育委員会による調査に引き続き、第３次の調査となります。今までの調査から、縄文時代以降、ある時は集落として、墓域として、またある時は城として、人々が活動した痕跡が確認されています。今回の調査では、新たに天花寺城に伴う堀切が見つかりました。

発掘調査により様々な発見があるわけですが、それと同時にほとんどの遺跡がやむをえず破壊されてしまう現状にあります。ここ天花寺城跡・小谷赤坂遺跡についても例外ではありません。『古（いにしえ）を知り、未来を考える』…私たちの祖先が残してくれた文化財の保護を祈念して止みません。

調査にあたりましては、地元の方々をはじめ、嬉野町教育委員会、県土木部・久居土木事務所から多大な御協力と共に暖かい御配慮をいただきました。文末となりましたが、心より厚く御礼申し上げます。

１９９７年３月

三重県埋蔵文化財センター
所長　奥　村　敏　夫

例　　言

1　本書は、三重県一志郡嬉野町天花寺に所在する遺跡群の発掘調査報告書である。調査対象区内には「天花寺城跡」と「小谷赤坂遺跡」が所在する。

2　天花寺城跡の範囲は、第１次発掘調査（『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告』　1996）に準ずる。

3　調査は、主要地方道松阪一志線緊急地方道路整備工事に伴い、緊急発掘調査を実施したものである。

4　調査は平成８年度に行った。調査の体制は以下の通りである。

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター（調査第一課）

技師　高田恵理子　　主事　木野本和之

5　当報告書の作成業務は三重県埋蔵文化財センター調査第一課及び管理指導課が行った。遺構・遺物の写真は木野本・高田が撮影し、執筆及び全体の編集は高田が行った。

6　調査にあたっては、嬉野町在住の方々、嬉野町教育委員会、及び県土木部道路建設課・久居土木事務所から多大な協力を受けたことを明記する。

7　報告書作成にあたっては、青木哲哉氏（立命館大学）、宇河雅之氏（斎宮歴史博物館）、笠井賢治氏（上野市教育委員会）、脇田敏實氏（嬉野町文化財保護委員）、和氣清章氏（嬉野町教育委員会）のご教示を得た。

8　挿図の方位は、すべて真北で示している。なお、磁針方位は西偏６°20′（平成３年）である。

9　挿図と写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応している。写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

10　当報告書での遺構は、通番となっている。また、番号の頭には、見た目の性格によって以下の番号をつけた。

ＳＤ……溝

ＳＫ……土坑

11　出土遺物、写真、図面等は当埋蔵文化財センターにて保管している。

12　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

Ⅰ．前言 …… （1）
Ⅱ．位置と環境 …… （1）
　1．位置 …… （1）
　2．歴史的環境 …… （1）
　　①天花寺丘陵上の遺跡 …… （1）
　　②中世後期の天花寺城周辺 …… （2）
Ⅲ．遺構 …… （4）
Ⅳ．遺物 …… （4）
Ⅴ．まとめ …… （12）

写真図版目次

図版1　調査前風景（東から）
図版2　調査風景
図版3　調査区北半部（西から）
図版4　調査区南半部（北西から）
図版5　ＳＤ１（西から）
図版6　ＳＫ３（東から）
図版7　出土遺物

挿図・表目次

第1図　遺跡位置図（1：100,000） …… （2）
第2図　遺跡地形図（1：5,000） …… （3）
第3図　遺構平面図（1：200） …… （5・6）
第4図　調査区西壁・北壁土層断面図（1：80） …… （7・8）
第5図　出土遺物実測図（土器・陶器）（1：4） …… （9）
第6図　出土遺物実測図（石製品）（1：4） …… （10）
第1表　出土遺物観察表（土器・陶器） …… （11）
第2表　出土遺物観察表（石製品） …… （11）

Ⅰ．前　言

一志郡嬉野町島田地内に近畿自動車道（久居～勢和多気）一志嬉野Ⅰ.C.が建設されたのに伴いⅠ.C.周辺道路の整備が必要となり、天花寺丘陵東側一帯は大きく改変されることとなった。この一端として県道松阪一志線の改良工事が計画され、今回発掘調査が行われることとなった。この天花寺丘陵周辺では平成７年度以降、発掘調査が進められている。今回の調査は事業名こそ異なるものの、当センターによる調査、嬉野町教育委員会による調査に次ぐ、第３次調査となる。

現地での調査は10月28日に開始し、12月20日に終了した。最終的な調査面積は700㎡である。重機による表土掘削の後、土層確認のため尾根に沿った方向でトレンチを入れ、南から北の方へ調査を進めた。この調査区は基本的に礫の混じった粘土層の堆積であり、雨の直後は足場が悪く天気が続けば土が固くなり、掘削の条件が良好とはいい難いものであった。

なお、最後まで調査に協力してくださった作業員の皆様に感謝の意をこめて御芳名を記す。

大倉みさ子、笠井安夫、倉田　保、
小林嘉兵衛、近藤喜一、阪井昭一、
里路あやの、沢井寛男、関山恭子、
田中ミツエ、萩原幸子、長谷川照雄、
長谷川ハルエ、船木文雄、松田きみ、
松本弘美、三浦勇三、山際喜代子、
山崎　衛

Ⅱ．位置と環境

１．位置

天花寺城跡・小谷赤坂遺跡は一志郡嬉野町天花寺に所在する。一志郡一志町と嬉野町の境にある通称小鳥山山塊より東へ延びる丘陵の東端部に位置し、今回の調査区は丘陵頂部から低地へ向かう斜面上に立地する。またこの丘陵を挟み、北側には雲出川が、東側にはその支流中村川が流れ、北東約1.5kmの地点でこの２河川は合流する。

２．歴史的環境

詳細は後述する通りであるが、今回の調査地は遺跡の縁辺部にあたり、遺構は天花寺城跡関連のもののみ検出された。また、遺構外出土遺物はほぼ丘陵頂部からの転落と思われるため、ここでは主に丘陵上に所在する遺跡の概観及び中世後期の天花寺城周辺の概況を記述するに留める。詳細は、第１次発掘調査報告書[1]に記載されているので、それを参照されたい。

①天花寺丘陵上の遺跡

縄文時代　遺構は確認されていないが、小谷赤坂遺跡で前期の石器が出土している。また、小谷赤坂遺跡の西約70m、片野池の南に馬ノ瀬遺跡[2]が位置し、ここからは早期の陥し穴状遺構が確認されている。少なくともこの段階には、人々の活動が認められる。

弥生時代　丘陵から見おろす平野部分には、前期中葉より集落が形成されている[3]。この丘陵上に集落が確実に認められるのは中期後葉では馬ノ瀬遺跡、後期では小谷赤坂遺跡であるが、いずれも短期間で終焉する。

古墳時代　前期には南支脈上に筒野古墳群が築かれる。小谷赤坂遺跡においてもほぼ同時期と考えられる古墳が築かれており、その中には前方後方墳と推定されるものも確認されている。後期においては小谷古墳群、赤坂古墳群など数多くの群集墳が築かれる。

古代　小谷赤坂遺跡において奈良時代の集落が営まれていた。丘陵東側の平野部には堀田遺跡[4]や平生遺跡[5]などの集落の他に天花寺廃寺[6]、中谷廃寺[7]が位置し、なおかつ丘陵北側斜面にはこれらの寺院に瓦を供給したと思われる天花寺瓦窯跡が所在する。古代の集落の状況を考えるうえで興味深い。

中世　天花寺城が築かれた。おそらく周辺に当該

期の集落は多く存在すると思われるが、その実体が明らかとなっているものは一番近隣で釜生田所在の弥五郎垣内遺跡[8]くらいであり、詳細は不明である。

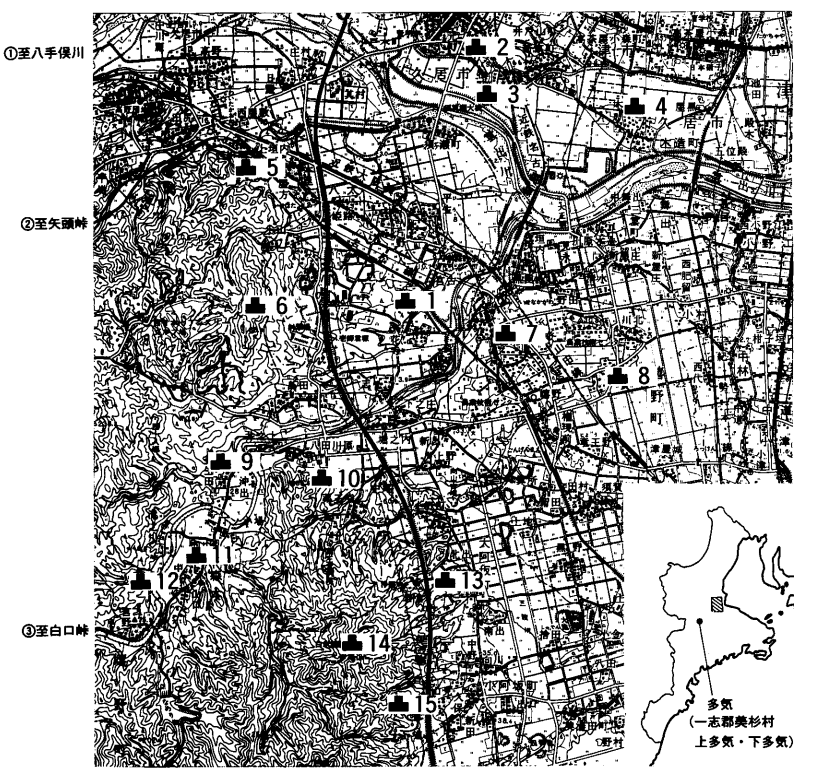
天花寺城は天花寺丘陵東側に位置し、その東・南・北側は急峻な傾斜地となっている。赤坂古墳群と小谷古墳群の間に開析谷がY字状に入り込む所があるが、そこが城域の西限と考えられる。範囲にして東西約430m、南北約500mとなる。丘陵上は一様に平坦であり、そこに何条もの堀や土塁が築かれ、5箇所程度の曲郭が確認されている。その東端は切岸が造られ、特に急峻な傾斜面となっている。この切岸直下が今回の調査区である。

②中世後期の天花寺城周辺

中世後期に天花寺城周辺に勢力を延ばしていたのは、北畠氏である。北畠氏は多気（一志郡美杉村上多気・下多気）に本拠を構え、この天花寺丘陵を含め、北は雲出川流域を大凡の境とした中伊勢から南伊勢、西は南伊賀から大和宇陀郡まで領域を広げていった。多気の地は急峻な山々に囲まれた盆地であり、ここから伊勢平野へ行くには、①八手俣川を経由して雲出川を下るルート、②矢頭峠を越えて波瀬川を下るルート、③白口峠を越えて中村川を下るルート、④仁柿（現飯南郡飯南町）を経由して櫛田川を下るルートがある。この内天花寺城は③ルート上に存在する。

さて、中村川・雲出川流域周辺一帯には、天花寺城以外にも多くの城が築かれていた（第1図参照）。これらは関与の仕方は異なるものの、いずれも北畠氏と何らかの関係を持っていた城である。北畠氏の拠点的な城であったと考えられる木造城（4）・森本城（11）・阿坂城（14）、拠点とまではいえないものの高い防御性を持つ釜生田城（9）・八田城（10）、寺院と強い繋がりを持ちつつ北畠氏と関係のある須賀城（積善寺）（8）・滝之川城（12）などがある。

天花寺城は、城と集団墓地とが共存していたと考えられている。この集団墓地のあり方は簡便なものであり、階層的に特殊な集団であるとは言い難い。北畠氏との関係は認められるものの、その成立には天花寺周辺の在地勢力が影響していたことが考えられる。成立の背景に関しては、須賀城・滝之川城も同様のことがいえる[9]。



1．天花寺城
2．川方城
3．森城
4．木造城
5．八太城
6．小山城
7．小川城
8．須賀城（積善寺跡）
9．釜生田城
10．八田城
11．森本城
12．滝之川城
13．高城城
14．阿坂城
15．枳城

※ ▨ は位置図の範囲を示す

第1図　遺跡位置図（1:100,000）（国土地理院「二本木」「松阪」を使用）

註

1）伊藤裕偉『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1996

2）一志町・嬉野町遺跡調査会『天花寺山』　1991

3）この付近の大規模集落には下之庄東方遺跡などが挙げられる。

4）早川裕巳「堀田遺跡」『昭和56年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会　1982　ほか

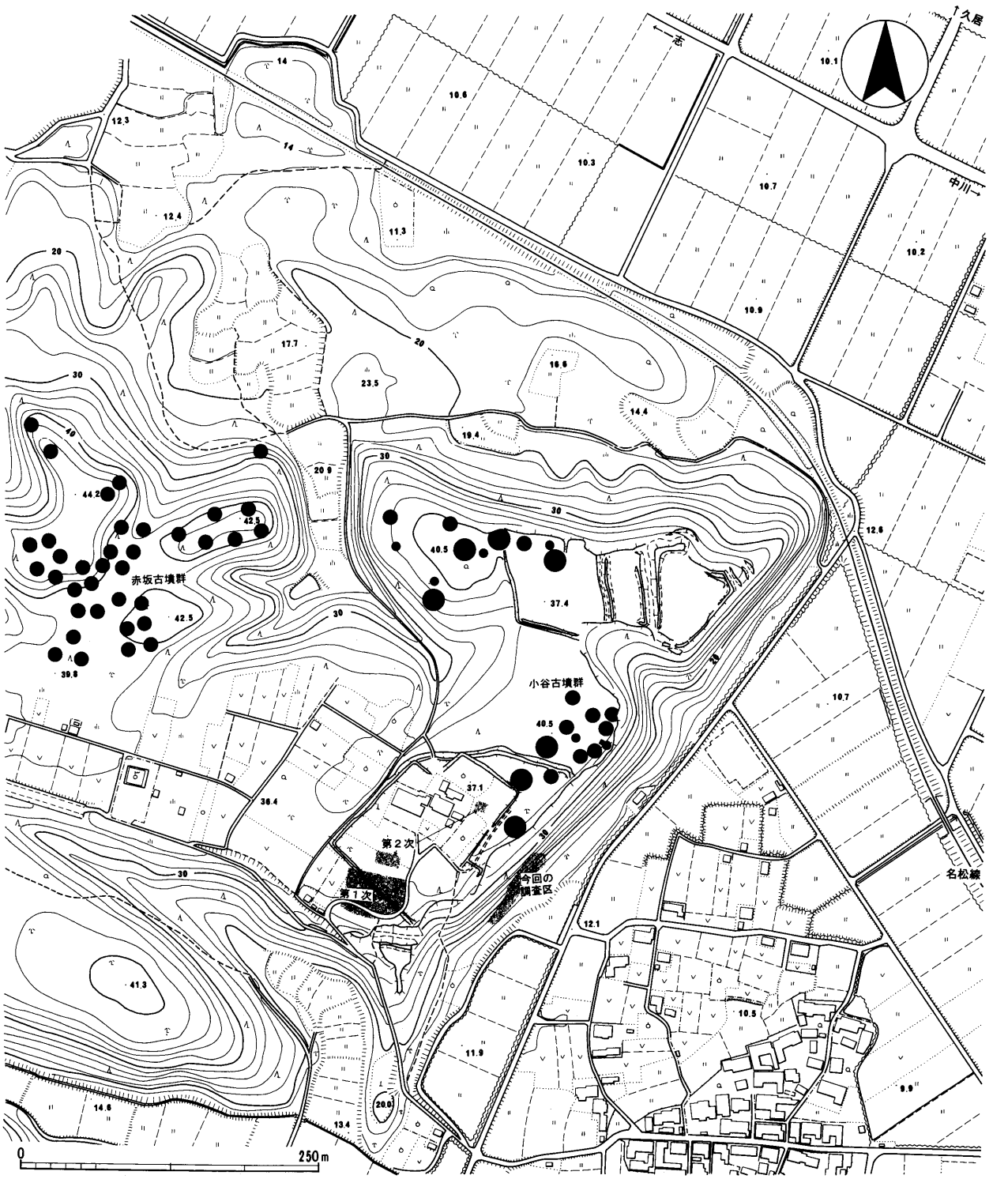
5）吉村利男『平生遺跡発掘調査報告』平生遺跡発掘調査団　1976

6）山田猛「天花寺廃寺」『昭和55年度県営圃場整備事業地域発掘調査報告』三重県教育委員会　1981　ほか

7）皇學館大學考古学研究会編『嬉野町の遺跡』　1989

8）和氣清章『三重県一志郡嬉野町埋蔵文化財調査概要』平成2年度嬉野町教育委員会　1991

9）当地域の中世城館に関しては、研究が進められており、いくつか論考も出されている。以下のものを参考にした。
伊藤裕偉「北畠氏領域における阿坂城とその周辺」『Mie History』vol.6　1993　「中世木造の動向と構造～北畠氏領域における支城形態の一事例～」『Mie History』vol.7　1994　「中世後期の地域情勢と大名権力～北畠氏による領域支配の実態～」『Mie History』vol.8　1996



第2図　遺跡地形図（1:5,000）

Ⅲ．遺　構

基本層序

今回の調査区は天花寺丘陵の東端に位置し、傾斜地となっていることもあり、確認された遺構はＳＤ１とＳＫ３のみにとどまる。

土層は複雑に幾層にも堆積するが、その多くは大小の礫を含み安定せず、丘陵上より崩落した二次堆積層と考えられる。

堀切

ＳＤ１　調査区南端で検出した。ＳＤ１は、等高線に平行した形で検出されたが、土層観察より調査区南端付近は小さな尾根が東方へ張り出していることが窺え、現時点ではその尾根を断ち切る堀切と考えておく。

西側は二段の落ち込みが確認され、上段は緩やかに、下段は急激に落ち込む。東側は西側の下段に対応する落ち込みのみ確認できた。これは現地形が西側から東側へ傾斜しており、上段に対応するものは築造当初から存在しなかったのかもしれない。あるいは本来存在していたものが、時間の経過と共に削平を受けたのだろうか。底部は幅約1.5mで、人間一人がちょうど歩くことのできる程度である。埋土は21層に分けられる。底の部分は比較的平坦であり、主に砂と粘土の互層となる。おそらく人為的に埋められたものと考えられる。

埋土より、底部に「大」と墨書された瀬戸美濃陶器及び土師器鍋の体部片が出土した。

土坑

ＳＫ３　調査区中央で検出した。直径約１ｍ、深さ約20cmの土坑で、大小の礫と共に土師器鍋片が出土した。埋土は青灰色粘土である。

その他

落ち込み　調査区北半部で落ち込みを確認した。範囲は東西約10m、南北約15mに及び、深さは一番深い所で検出面より約２ｍである。中から土器片が少量出土した。その内１点は山茶椀片であり、少なくとも中世までは凹地となっていたようである。現況で同じような地形が調査区外北側へ続いているため、さらに北方へ延びることが想定される。

Ⅳ．遺　物

今回の調査で出土した遺物は極僅かであり、ほとんどが遺構外及び表土付近より出土したものである。

ＳＤ１（１）

瀬戸美濃産陶器である。底部に足が２箇所残存しており、その形状から香炉と思われる。時期は大窯Ⅰ期[1]に比定されるのであろうか。底部外面には「大」と墨書されている。

ＳＫ３（２）

土師器鍋の口縁部である。時期は伊藤裕偉氏編年の第４段階[2]に属し、ほぼ15世紀後半のものである。

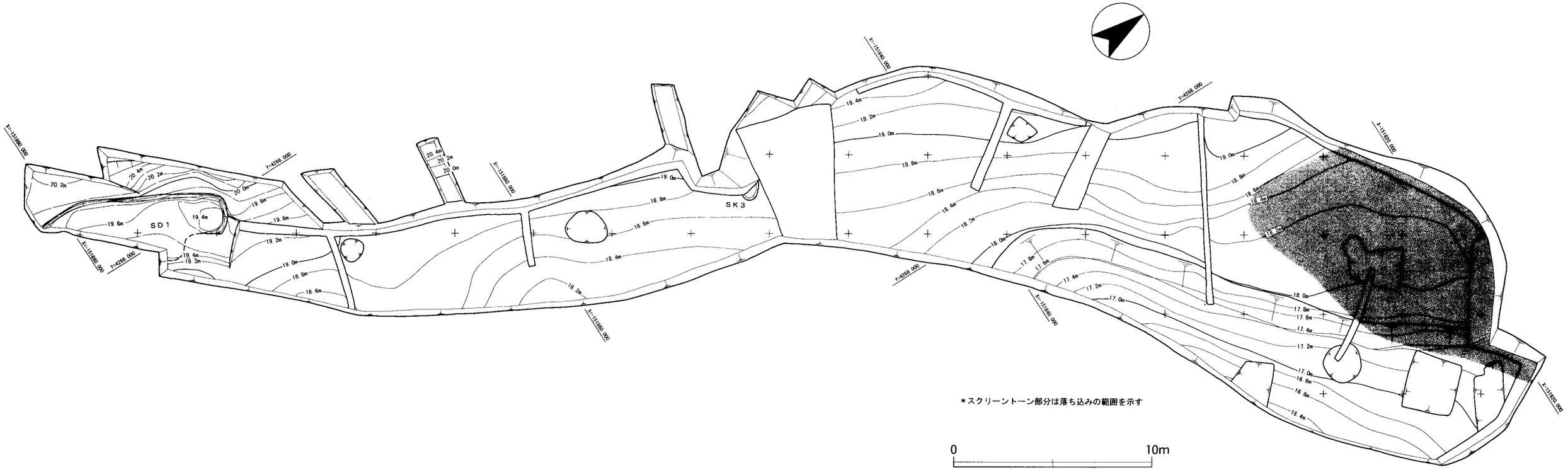
包含層（３～25）

３～５は弥生時代の遺物である。３は壺の底部である。全体的に摩耗著しいが、僅かに底部内面にハケ目が残る。弥生中期頃のものであろうか。４は受口甕の口縁部である。口縁部に刺突をもち、頸部にハケ目を有す。５は高杯の脚部である。三方に円形の透孔をもち、外面は明瞭なハケ目を施す。６は広口壺である。頸部に突帯を巡らせ、全体的に摩耗著しいが、所々に縦方向のヘラ磨きが認められる。かなり大型のものになる。４～６は弥生時代後期のものである。

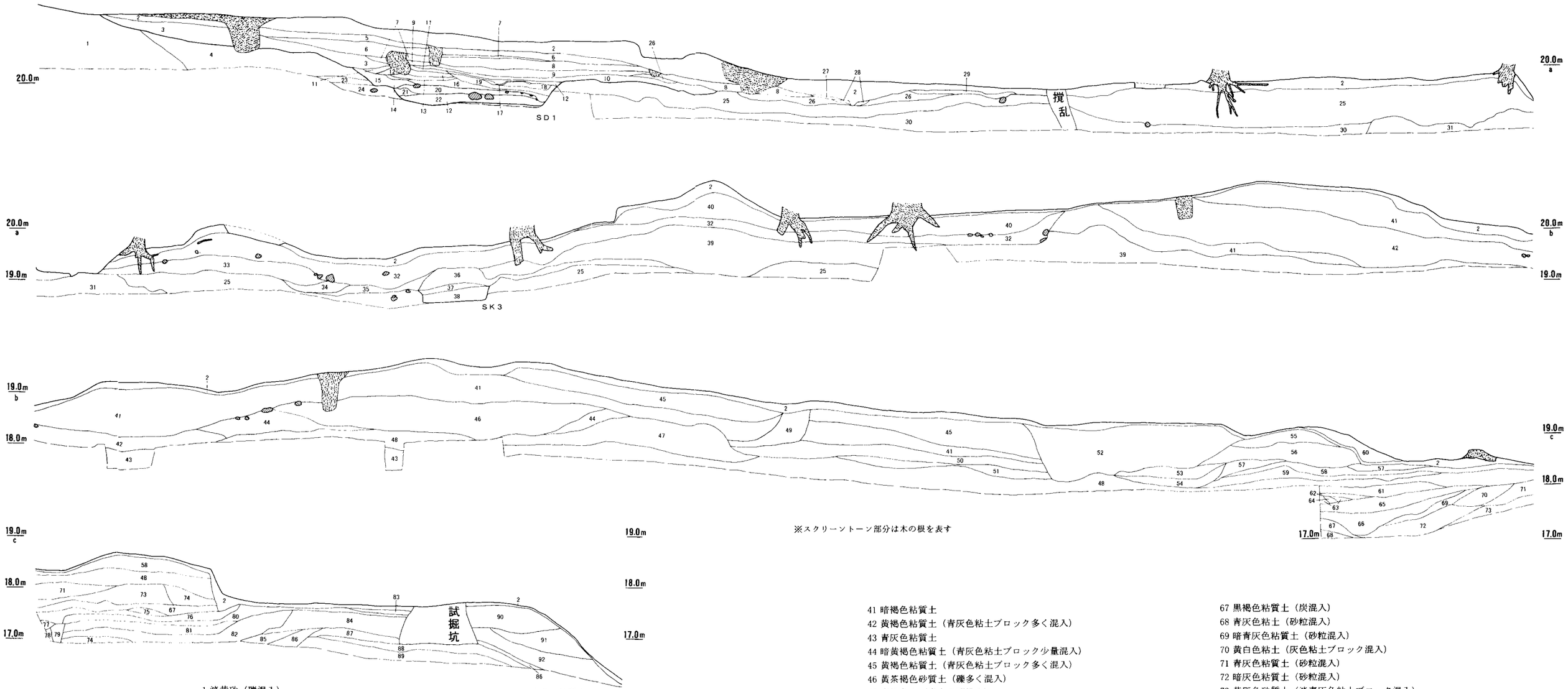
７～10は古墳時代の遺物である。７・８は円筒埴輪片で、９は須恵器杯蓋である。９は口径が11cmと小さく、天井部を削っている。10は須恵器瓶である。体部には２条の凹線を巡らせ、その間に１箇所注口部分を作る。この注口部分は穿孔後、粘土紐を貼り付けている。

９・10はいずれも田辺昭三氏の編年でみるとＴＫ217型式並行期[3]のものと思われる。

11は平瓦である。内面には糸切り痕及び布目痕が、



第３図　遺構平面図（1:200）



1 淡黄砂（礫混入）
2 明黄灰色粘質土（灰白色粘土ブロック混入）
3 赤黄灰色土
4 黄灰色土
5 褐色土（黄褐色砂混入）
6 赤褐色土
7 黄褐色砂
8 暗赤褐色土（明褐色土がマーブル状に入る）
9 茶褐色土
10 明赤灰色粘質土
11 黄褐色土
12 暗茶褐色粘質土
13 赤褐色土（砂礫多く混入）
14 暗褐色粘土
15 黄褐色砂質土
16 淡褐灰色砂（黄灰色粘土ブロック混入）
17 炭
18 淡灰色砂（暗灰砂がマーブル状に入る）
19 灰褐色砂（粗砂多く混入）
20 灰褐色粘質土
21 暗褐色粘質土
22 赤黄褐色粘質土
23 暗黄灰色砂（礫多く混入）
24 淡青灰色粘質土
25 暗褐色粘質土
26 灰褐色粘質土（砂粒混入）
27 明褐色砂質土（淡灰色粘土ブロック混入）
28 褐灰色粘質土
29 暗褐色土
30 淡青灰色粘質土
31 淡褐色砂（礫混入）
32 明黄褐色粘質土
33 淡灰色粘質土
34 赤褐色粘質土（礫少量混入）
35 明褐色砂質土（礫多く混入）
36 淡黄灰色砂
37 青灰色砂質土（粘土ブロック混入）
38 青灰色粘土
39 淡褐色粘質土
40 赤黄褐色土（粘土ブロック混入）
41 暗褐色粘質土
42 黄褐色粘質土（青灰色粘土ブロック多く混入）
43 青灰色粘質土
44 暗黄褐色粘質土（青灰色粘土ブロック少量混入）
45 黄褐色粘質土（青灰色粘土ブロック多く混入）
46 黄茶褐色砂質土（礫多く混入）
47 赤褐色土（拳大の礫混入）
48 褐色粘質土（赤褐色ブロック多く混入）
49 赤褐色粘質土（青灰色粘土ブロック少量混入）
50 赤褐色粘質土（青灰色粘土ブロック多く混入）
51 赤褐色砂質土（拳大の礫混入）
52 地滑り崩落土石層
53 灰褐色砂質土
54 暗灰褐色土
55 淡褐色土（小礫混入）
56 淡褐色土（青灰色粘土ブロック混入）
57 灰色砂質土（橙色ブロック多く混入）
58 灰色粘質土（橙色ブロック多く混入）
59 暗灰色粘質土（砂礫混入）
60 黄褐色粘質土（淡青灰色粘土ブロック混入）
61 暗灰色粘質土
62 橙白色粘土（青灰色粘土ブロック多く混入）
63 明灰色砂質土
64 黒褐色粘質土（砂粒混入）
65 暗灰色粘質土（青灰色粘土ブロック混入）
66 淡緑色粗砂（淡緑色粘土ブロック多く混入）
67 黒褐色粘質土（炭混入）
68 青灰色粘土（砂粒混入）
69 暗青灰色粘質土（砂粒混入）
70 黄白色粘土（灰色粘土ブロック混入）
71 青灰色粘質土（砂粒混入）
72 暗灰色粘質土（砂粒混入）
73 黄灰色砂質土（淡青灰色粘土ブロック混入）
74 青灰色粘土
75 淡茶灰色粘質土（灰褐色粘土混入）
76 青灰色砂質土（明褐色～青灰色粘土を混入）
77 暗青灰色粘質土（礫多く混入）
78 青灰色粘土
79 暗灰色粘質土
80 暗青灰色粘質土
81 青灰色粘土
82 青灰色砂（青灰色粘土ブロック混入）
83 灰色粘質土（砂粒混入）
84 灰色粘質土（赤褐色ブロック混入）
85 灰褐色粘土
86 青灰色粘土
87 灰褐色粘質土（砂粒混入）
88 黄灰色粘質土
89 赤褐色粘質土（灰色粘土ブロック混入）
90 灰褐色土
91 淡褐色土
92 赤褐色土

第４図　調査区西壁・北壁土層断面図（1:80）

外面には叩き目が残る。おそらく、奈良時代のものであろう。

12は陶器椀（山茶椀）である。尾張型のもので、藤澤氏の編年で第７型式[4]に比定されよう。

13は須恵質で、円盤状のものを端の部分のみ一方向に折り曲げたものである。折り曲げた側は指ナデがなされており、凸凹している。折り曲げていない側には端部に沿うように剝離の痕跡が認められる。一見奈良時代の須恵器底部及び高台部にも見えるが通常のつくりとは明らかに異なり、全体の形状及び用途は不明である。

14は砥石である。断面はほぼ正方形であり、両端は欠損している。一面のみ擦痕が確認された。石材の粒子が細かく、中砥～仕上砥と思われる。

15～25は五輪塔である。材質はいずれも砂岩質で、一志町井関周辺で採掘されたものと思われる。15～21が組み合わせて積み上げる五輪塔で、22～25が一石五輪塔である。15～17が空風輪、18が空風火輪、19・20が水輪、21が地輪である。19は上下にわずかな凹みがある。各所破損し風化著しいが、22は火水輪、23・24は火水地輪、25は各部残存する。いずれも前回の調査で出土した五輪塔と形が類似し、15世紀末頃のものであろう。

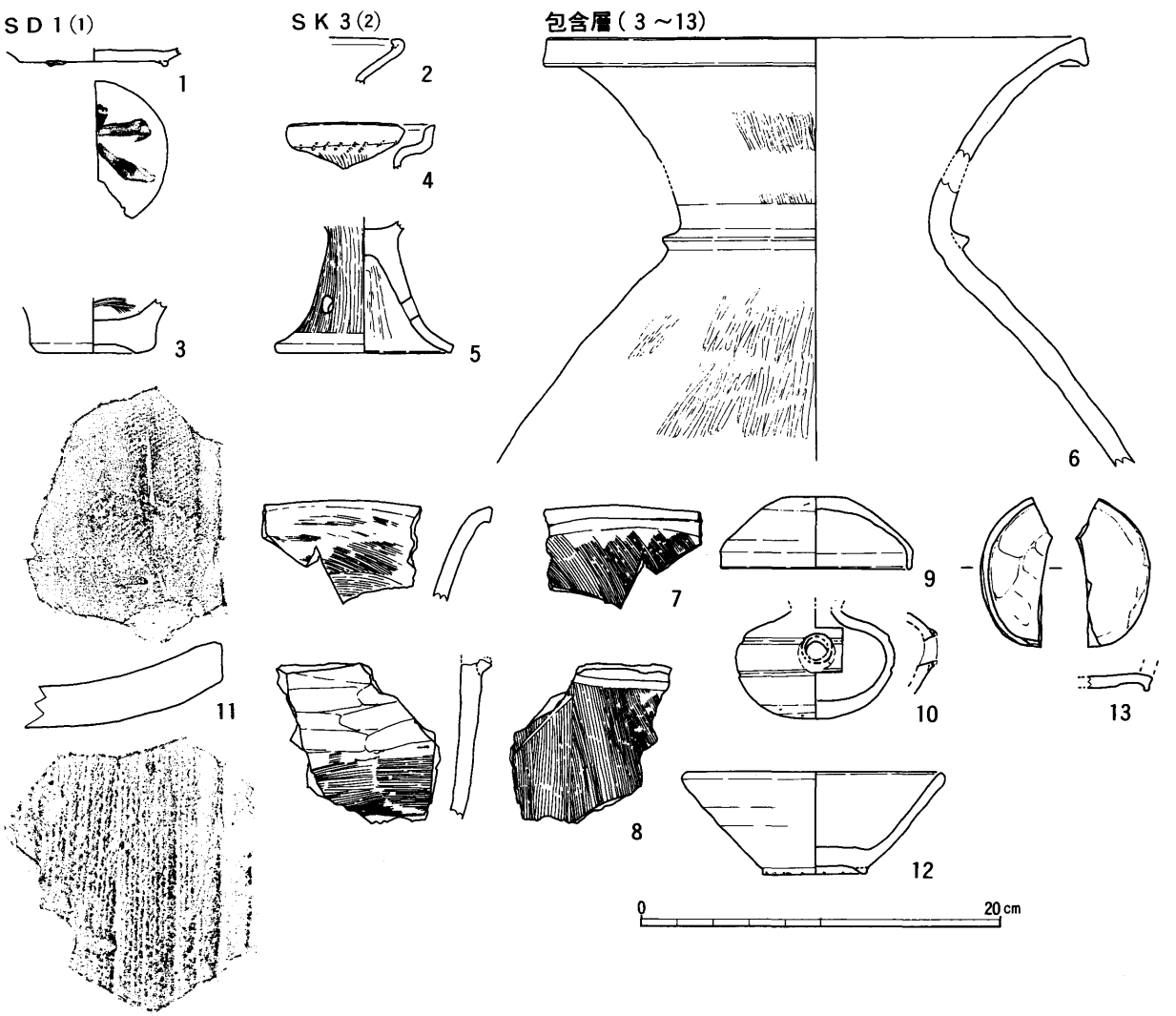
註

1）藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」『研究紀要』Ⅴ　瀬戸市歴史民俗資料館　1986

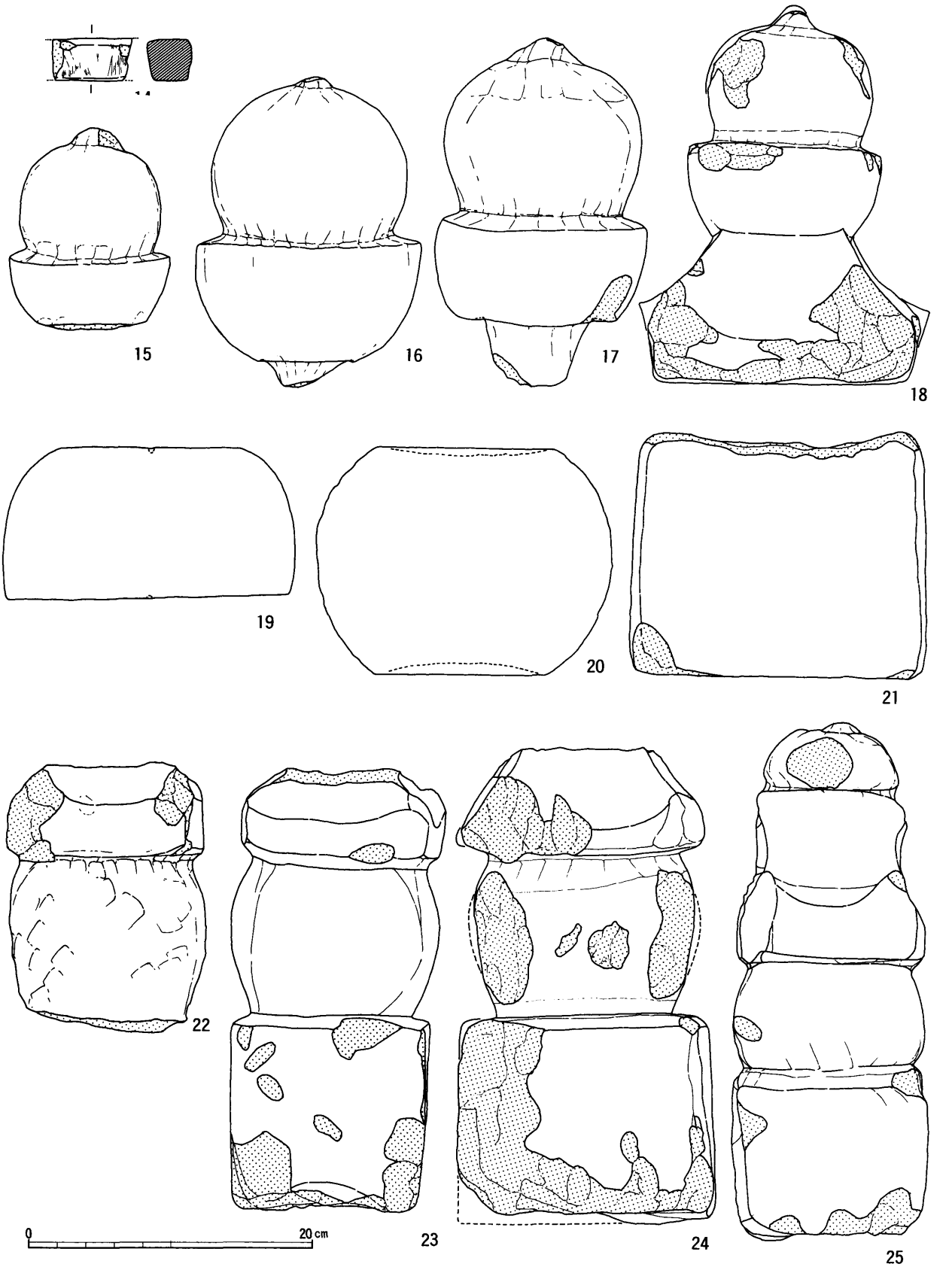
2）伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie History』vol.1　1990

3）田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ　1966

4）藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第３号　三重県埋蔵文化財センター　1994



第５図　出土遺物実測図（土器・陶器）（1:4）



第6図　出土遺物実測図（石製品）（1:4）

図版番号	遺構番号	材質・器種	残存度	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	特記事項	登録番号
1	SD1	瀬戸美濃陶器香炉	底部1/3		8.2		外；ロクロナデ・ケズリ 内；ロクロナデ	密　1mm以下の砂粒	良	淡黄褐色	墨書	021－02
2	SK3	土師器鍋	口1/12				内外面共ヨコナデ	やや密	並	灰白色	スス	002－04
3	c7 撹乱	弥生土器壺	底部ほぼ完存		7.0		外；摩滅　　内；ハケ	粗	並	橙色及び褐灰色		001－06
4	d・e2 テストピット	弥生土器甕	口1/12				外；ヨコナデ・ハケ・刺突 内；ナデ	やや密	並	にぶい黄橙色		003－01
5	d・e2 テストピット	弥生土器高杯	脚1/4		脚部径10.0		外；縦ハケ・ヨコナデ 内；ナデ	やや密	並	黄橙色		001－03
6	試掘No4	弥生土器壺	口1/4	30.0			外；摩耗（一部ヘラミガキ） 内；摩滅	やや粗　7mm以下の砂粒	並	灰白色		004－01
7	d・e2 テストピット	土師質埴輪	口1/12				内外面共斜めハケ	やや密	並	にぶい黄橙色		002－06
8	d2 検出中	土師質埴輪					外；ヨコナデ・縦ハケ 内；ナデ・ヨコハケ	やや密	並	橙色		003－02
9	b17 拡張トレンチ	須恵器杯蓋	口2/3	11.0		4.0	外；ロクロナデ・ロクロケズリ 内；ロクロナデ	密	良	灰色		001－02
10	b17 拡張トレンチ	須恵器瓶	体部完存				外；ロクロナデ・ケズリ 内；ロクロナデ	やや密	良	灰色		002－02
11	表土掘削	須恵質平瓦	1/4程度?			厚2.2	外；叩き目 内；布目痕・ナデ	密	良	灰色		003－04
12	b6　集石	陶器碗（山茶椀）	口5/6	14.6	5.9	5.7	内外面ロクロナデ 底部糸切り痕	やや粗	良	浅黄色		001－05
13	d2 テストピット	須恵器？	1/3			1.0		密	良	灰色		003－03

第1表　出土遺物観察表（土器・陶器）

※残存度においてそれぞれ口は口縁部を、脚は脚部を表す。

図版番号	遺構番号	器種	残存部分	最大幅(cm)	高さ(cm)	重さ(kg)	石材	特記事項	登録番号
14	b6 集石	砥石		3.1			泥岩か？	一面使用痕あり	021－01
15	b12 検出中	五輪塔	空風輪	13.0			砂岩		014－01
16	表土掘削	五輪塔	空風輪	11.7			砂岩		005－02
17	表土掘削	五輪塔	空風輪	14.9	24.7	5.7	砂岩		012－01
18	表土掘削	五輪塔	空風火輪	17.5	26.5	8.2	砂岩		010－01
19	表土掘削	五輪塔	水輪	20.5	10.6	6.5	砂岩		006－01
20	表土掘削	五輪塔	水輪	20.8	16.1	9.18	砂岩		007－01
21	表採B	五輪塔	地輪	20.0	17.4	12.85	砂岩		020－01
22	表採G	一石五輪塔	火水輪	13.9			砂岩		014－02
23	表土掘削	一石五輪塔	火水地輪	14.6			砂岩		013－01
24	表土掘削	一石五輪塔	火水地輪	17.4			砂岩		011－01
25	表採E	一石五輪塔	各部残存	13.8	36.8	9.43	砂岩		017－01

第2表　出土遺物観察表（石製品）

Ⅴ．まとめ

今回の調査地は切岸直下の傾斜地であり、遺構・遺物共に僅かではあったものの、以下のことが明らかになった。

①遺構について

まず、新たに堀切（ＳＤ１）が確認されたことである。これは調査区南端部で検出された溝であり、天花寺丘陵全体より見るとＳＤ１は城の南東部に位置する。現地形を見ると、僅かではあるが南東方向への張り出しが認められ、かつてはより明確な尾根があったと思われる。

また、調査区付近は土層断面から、もともとは起伏の激しい所であったと推定される。その微凹地部分に、豪雨などの自然現象によりあるいは丘陵頂部で切岸を造ることにより、丘陵上から幾度も土砂が崩落したものと考えられる。ＳＫ３は本報告では土坑として扱ったが、埋土が他の崩落土と考えられる土質と類似し、凹地に土器を含んだ土砂が崩落したものの可能性が高い。

さらに、調査区北側の落ち込みは土層断面より人工的なものではないと判断したが、当地は丘陵斜面上であり、このような所に自然地形としての落ち込みが存在しうるのか疑問が残る。また、この落ち込みの底の部分より山茶椀片が出土しており、少なくとも中世前期までは凹地状となっていたようである。落ち込みの埋土も丘陵頂部からの崩落土と捉えられる。調査区西側の丘陵頂部に切岸が位置している。この切岸を造成した時期及び落ち込みの存続期が不明であるため、落ち込みと切岸の関係について現状では明確なことはいえない。

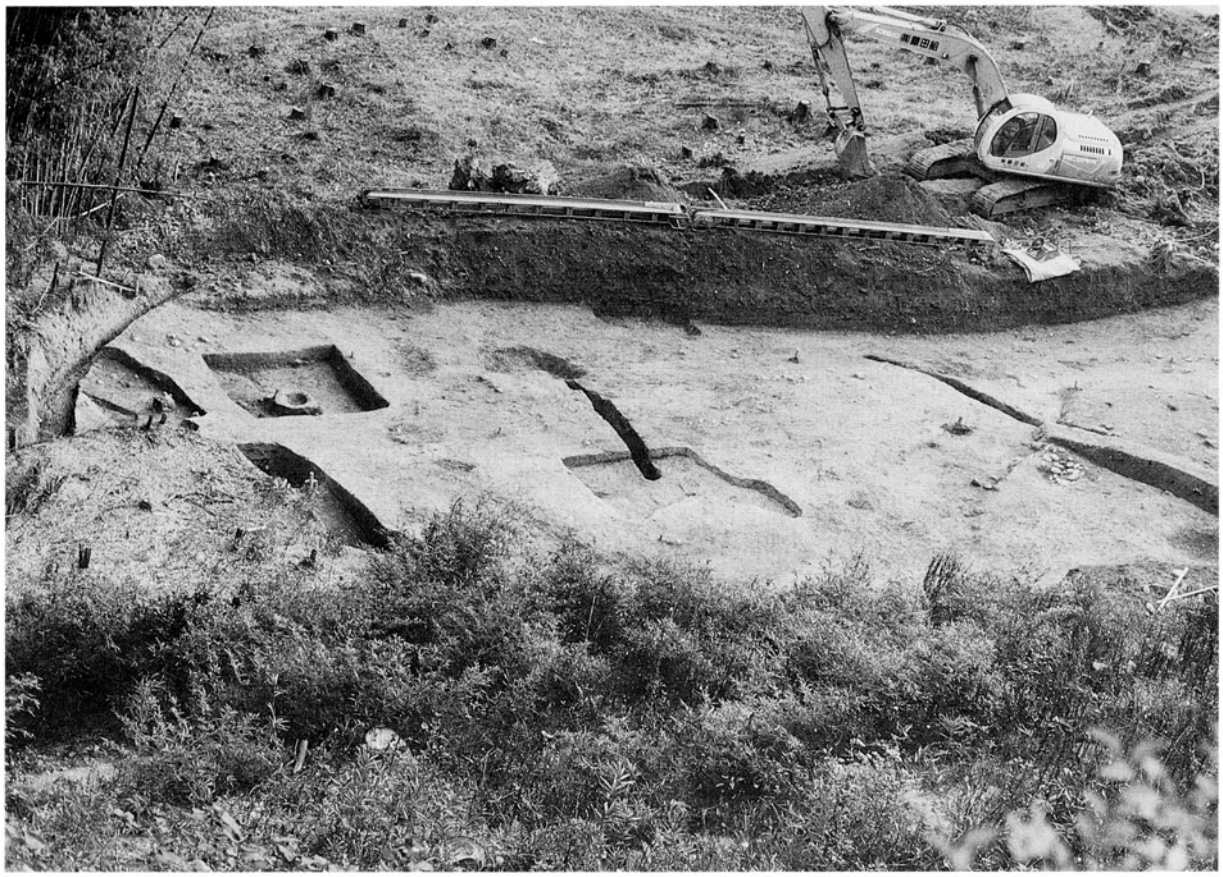
②出土遺物について

遺物はほとんどが遺構外で出土している。その時期を見る限り、丘陵上の遺跡の動向とほぼ重なり、おそらく崩落土内に混入したものと考えられる。

天花寺丘陵周辺は近年開発が進み、今後も調査が継続されるのは必至である。遺跡が破壊されるのは残念であるが、そういった現状の中で天花寺城跡・小谷赤坂遺跡をはじめとした天花寺周辺の歴史をより一層明らかにしていくことが、我々の責務であると考える。

1．調査前風景（東から）

2．調査風景

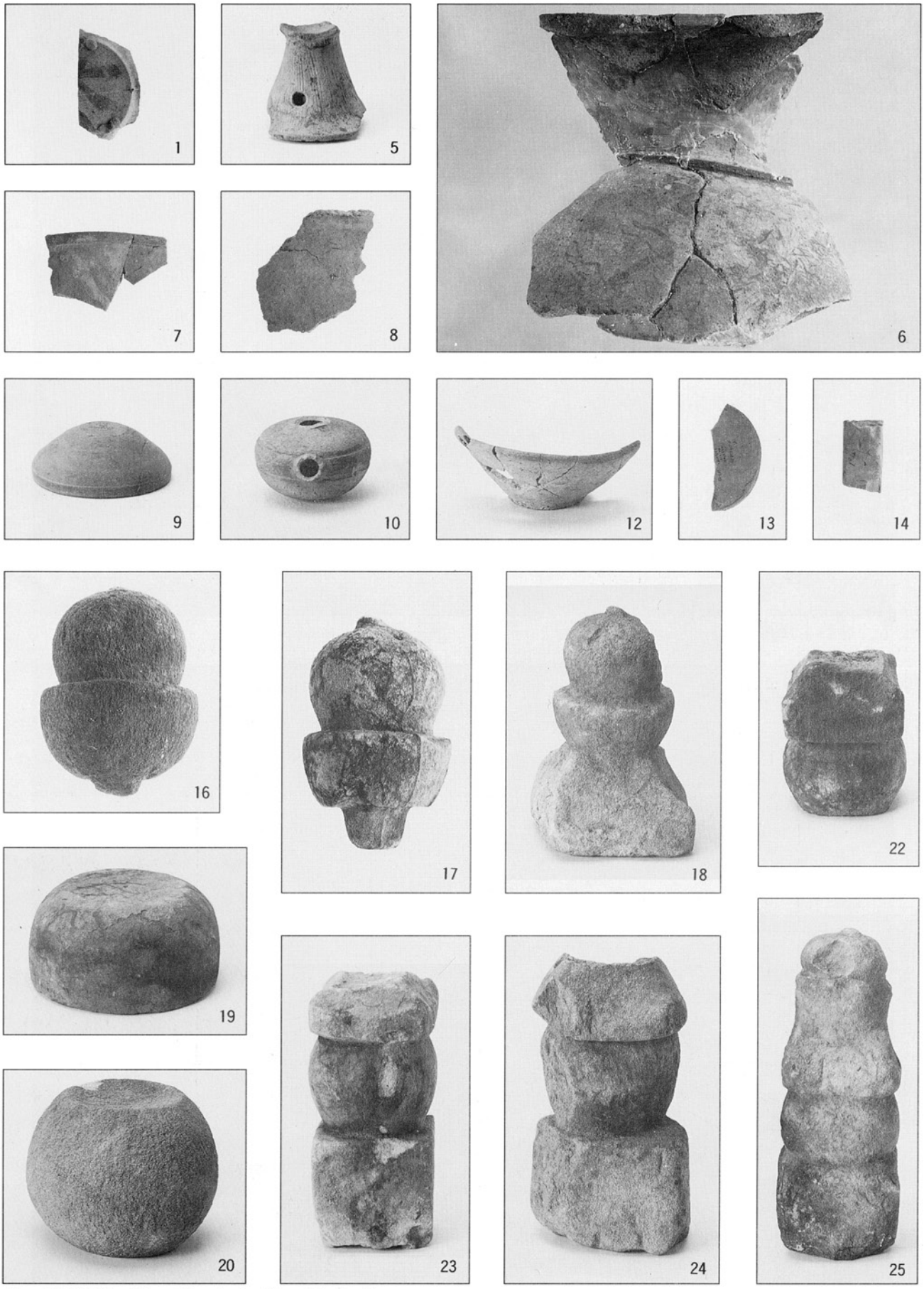


3．調査区北半部（西から）

4．調査区南半部（北西から）

5．ＳＤ１（西から）

6．ＳＫ３（東から）



7．出土遺物（1～14－1:4、16～25－1:6）

報 告 書 抄 録

ふりがな	てんげいじじょうあと・こたにあかさかいせきはっくつちょうさほうこく2
書　　名	天花寺城跡・小谷赤坂遺跡発掘調査報告（II）
副 書 名	～一志郡嬉野町天花寺所在、天花寺城跡・小谷赤坂遺跡（第３次）の調査～
巻　　次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	１５２
編著者名	高田恵理子
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒515－03　三重県多気郡明和町竹川５０３　TEL05965－2－1732
発行年月日	１９９７年3月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふ り が な 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積㎡	調査原因
てんげいじじょうあと 天花寺城跡 こたにあかさかいせき 小谷赤坂遺跡	いちしぐんうれしのちょうてんげいじ 一志郡嬉野町天花寺	244058	90 94	34° 37′48″	136° 27′55″	19961028 ～ 19961220	700	県道松阪一志線 道路整備工事

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
天花寺城跡 小谷赤坂遺跡		中世	溝・土坑	弥生土器・須恵器 埴輪・山茶椀 五輪塔・瓦	

平成9(1997)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年7月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告　152

天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告(II)

1997(平成九年)年3月31日

編集
発行　三重県埋蔵文化財センター

印刷　有限会社第一プリント社